

# 泉鏡花「琵琶伝」の鸚鵡

——鸚鵡琵琶の役割とその典拠——

濱 谷 美 里

はじめに

泉鏡花「琵琶伝」<sup>1</sup>は、明治二十九年に『国民之友』に掲載された鏡花初期作品の一つである。同年『太陽』に掲載された「海城発電」とともに昭和十五年から昭和十七年刊行の岩波版『鏡花全集』には収録されなかった。これは、「当時の軍国的風潮下に反軍反戦的色彩を帯びていると見られたためであろう」<sup>2</sup>とされている。確かに脱営といった反戦的な要素は見られるものの、しかしながら本作の主題は「純愛の勝利であり、その骨子は愛人を殺された女の復讐譚とみるべき」<sup>3</sup>と言われるように、「琵琶伝」はヒロインであるお通の恋と復讐を描いた作品である。

「琵琶伝」は五章から成る短篇小説で、ヒロインのお通、お通のいとこで想い人である相本謙三郎、お通に恋仲の相手がいると承知で結婚した陸軍尉官近藤重隆という三人の主要登場人物によって構成される。そして、清川家（お通の家）で長い間養育され琵琶と名付けられた鸚鵡は、「琵琶伝」というタイトルや、「琵琶伝」内題【図版①】に鸚鵡の絵が添えられていることから窺えるように、物語の鍵となる存在として登場している。この鸚鵡琵琶については、これ



琵琶  
泉鏡花

新編が、（此）入をききむとて、遊戯より休息の室に聞きける時、介添の婦人は不意に顔を見て驚きぬ。面貌殆ど生色なく、今にも倒れぬがかりなるが、ものに激したる状なるにぞ、介添は心元なげに、つい居て恋を探げながら、（思）「よし御身でもおぼしめさるべしなにか」と恋を秘めてを明ひぬ。介添を強ひつ。  
新編に添ひなる顔と胸じて、介添を強ひつ。  
「何」とばかり簡單に言捨てたるまゝ、身さへ眼をさ（動かさ）で、一心唯思ふとある其一方を見前めつゝ、衣を換ふるも帯を占むるも、衣紋を直すも、帯を

【図版①】「琵琶伝」内題

まで先行研究に於いて複数の典拠が指摘されているが確定を見ていない。本作を論じるにあたり、まず「琵琶伝」の梗概を以下に示す。

お通が父清川通知の遺言によつて陸軍尉官近藤重隆と結婚し、床入をする場面から物語は始まる。結婚初夜、お通は出来さえすれば妻たる節操を破ると夫に言い放ち、重隆はその言葉に怒気心頭を衝いてお通を「狐屋」に幽閉する。一方、出征の召集を受けた謙三郎は、叔母（お通の母）に会いに清川家を訪れていた。狐児である謙三郎はある時期からお通の家に引き取られて同居しており、二人は恋仲であった。謙三郎がお通を呼ぶ際には、鸚鵡の琵琶を呼んで口笛を鳴らし、琵琶が「ツウチャン」とお通の名を呼んで二人を仲介していた。叔母は、未練を残さぬようと鸚鵡を籠から放ち、行方が分からなくなった鸚鵡は、一時物語の表面から姿を消す。この後、叔母の強い勧めで、謙三郎は脱管の罪を犯してお通に会いに行くこととなる。お通は狐屋に一年以上も幽閉されており、謙三郎は狐屋の前で三日三晩お通に会う機会を待ち続ける。門番の伝内は「入るなら吾を殺せ」（第三章、四五頁）と言ひ、謙三郎は門番を殺害して一瞬の逢瀬が叶うが、重隆とその部下によつて捕らえられ、脱管と殺人の罪により銃殺刑となる。その後、重隆によつて謙三郎の処刑を見せられたお通は、正常な精神状態ではいられず里帰りをしていた。清川家の書齋で謙三郎の名を呼びかける時、自分の名を呼ぶ琵琶の音が聞こえ、それに誘われていつしか謙三郎の墓前に至る。そこで、謙三郎の墓を辱めた重隆に対し、お通はその銃で撃たれながらも復讐を果たす。重隆とお通が相打ちして果てた謙三郎の墓前に琵琶の「ツウチャン」と呼ぶ声が響く。

以上の展開から鸚鵡琵琶は、謙三郎がお通を呼ぶのと同じように「ツウチャン」と呼び、その呼び声によつて主人公

たちの間を媒介している。さらに、謙三郎の死後、再びその呼び声によってお通を誘い出し、謙三郎の墓前で、彼女らの恋を阻んだ敵である夫近藤重隆とお通を引き合わせ、お通に復讐を果たさせるように導いた存在である。

二人の心情を媒介し、謙三郎の死後に於いてもその意思を体現するように働く役割を果たすが、なぜ鸚鵡なのであるのか。さらには、鸚鵡になぜ琵琶という名前が付けられているのか、「琵琶伝」というタイトルにどういった意味があるのか、数々の疑問点が浮かぶ鸚鵡琵琶について新たに典拠を指摘し、その他新資料を交えて再検討することが本論文の目的である。

### 一、「琵琶伝」作中の鸚鵡琵琶

鸚鵡琵琶を検討するにあたり、「琵琶伝」作中で鸚鵡琵琶について言及されている箇所を順を追って見ていこう。まず作品内での鸚鵡琵琶の性質や役割を明確にすることが、典拠の確定や典拠に無い「琵琶伝」の独自性を明らかにする前提として必要である。以下、引用する場面には①から⑥の番号を付した。引用箇所には線を付す場合は、外見に付随する特徴には破線、人間の言葉を真似る（人語を話す）箇所には傍線、人間のような思考・行動をする箇所は二重傍線、怪奇的・非現実的な要素が見られる箇所には波線を付した。

#### 【場面①】

まず、謙三郎が日清戦争の召集に際して母のような存在である叔母に会うべく、清川家を訪れる場面を見ていく。

渠が書斎の椽前には、一個数奇を尽したる鳥籠を懸けたる中に、一羽の純白なる鸚鵡あり、餌を啄ばむにも飽きたりけむ、もの淋しげに謙三郎の後姿を見遣りつゝ、頭を左右に傾け居れり。（第二章、三八頁）

鸚鵡琵琶は「数奇を尽くした鳥籠」に入れられ、珍重されている。また、鸚鵡は後述するように色鮮やかなイメージも

ある鳥であるが、白い鸚鵡、とりわけ純白の鸚鵡であることも特徴的である。そして、「もの淋しげ」な様子で謙三郎の後ろ姿を見遣る様子から、人間のような思考・振舞いをしているかのように描かれている。

### 【場面②】

次に、謙三郎が鸚鵡の名を呼びかける場面を見ていく。

一室寂たること頃刻なりし、謙三郎は其清秀なる面に鸚鵡を見向きて、太く物案ずる状なりしが、憂うる如く、危む如く、はた人に憚ることあるもの、如く、「琵琶」と一声、鸚鵡を呼べり。琵琶とは蓋し鸚鵡の名ならむ。低く口笛を鳴らすとひとしく、

「ツウチャン、ツウチャン」

と叫べる声、奥深きこの書斎を徹して、一種の音調打響くに、謙三郎は愁然として思はず涙を催しぬ。(第二章、三八頁)

謙三郎が琵琶の名を呼び、低く口笛を鳴らすと琵琶は「ツウチャン」とお通の名を呼んだ。「ツウチャン」という呼び声は、作中で謙三郎がお通を「通ちゃん」(第三章、四五頁)と呼んでいることから、謙三郎のお通への呼び声を真似たものであることが分かる。

### 【場面③】

次に、琵琶を介してお通と謙三郎が会っていた様子が回想される場面を見ていく。

琵琶は年久しく清川の家に養なはれつ。お通と渠が従兄なる謙三郎との間に処して、巧みに其情交を暖めたりき。他なし、お通が此家の愛娘として、室を隔てながら家を整しくしたりし頃、未だ近藤に嫁がざりし以前には、謙三郎の用ありて、お通に見えむと欲することある毎に、今しも渠がなしたる如く、籠の中なる琵琶を呼びて、爾く口

笛を鳴らすとともに、琵琶が玲瓏なる声をもて、「ツウチヤン、ツウチヤン」と伝令すべく、よく馴らされてありしかば、此時の如く声を揚げて二たび三たび呼ぶと、もに、帳内深き処肅として物を縫ふ女、物指ものさしを棄て、針を措きて、直ちに謙三郎に來りつゝ、笑顔を合はすが例なりしなり。(第二章、三八頁)

琵琶は、お通とこのいところである謙三郎の情交の仲立ちをした。謙三郎がお通を呼ぶ際には、籠の中の琵琶を呼びつつ口笛を吹き、琵琶の「ツウチヤン」という伝令によって、お通は謙三郎のもとに向かうのが例であつた。琵琶が謙三郎の真似をしてお通を呼ぶようにしつけられており、人真似をする(人語を話す)という特徴が見られる。

#### 【場面④】

次に、琵琶が籠から放たれる場面を見ていく。

時に椽側あしおとに登音あり。女々しき風情を見られまじと、謙三郎の立ちたる時、叔母は早くも此方こなたに來りて、突然鳥籠の蓋を開けつ。(中略)叔母は此方を見も返らで、琵琶の行衛を瞻りつゝ、椽側に立ちたるが、あはれ消残しょうざんる樹間このまの雪か、緑翠りよくろ暗きあたり白き鸚鵡の見え隠れかゞに、蜩せみ一声鳴さける時、手を以て涙を拭ひつゝ、徐しだに謙三郎を顧みたり。(第二章、三九頁)

逃げていく鸚鵡を樹間の雪に喩え、樹間の影が暗い緑である様子と、白い鸚鵡を対比させている。鸚鵡の白を強調する描写である。

#### 【場面⑤】

次に、謙三郎が銃殺されたあとの場面を見ていく。謙三郎の銃殺刑を見せられたお通は里帰りをしており、清川家の書齋で今は亡き想い人の名を呼びかけていた。お通が「謙さん」と呼ぶと、それに応えるかのように「ツウチヤン」という呼び声が聞こえてくる。

落葉さらりと障子を撫で、夜は漸く迫りつゝ、あるかなきかのお通の姿も黄昏の色に蔽おほはれつ。炭火のじやうの動く時、いかにしてか聞こえつらむ。

「ツウチヤン。」

とお通を呼べり。

再び

「ツウチヤン。」

とお通を呼べり。お通は黙想の夢より覚めて、声する方を屹まと仰ぎぬ。

「ツウチヤン」

とまた繰返せり。お通はうか／＼と立起りて、(中略)何処ともなく歩み去りぬ。

(第四章、四七頁、一重の傍線は省略した。)

琵琶は叔母の手によつて籠から放たれ、姿を消していたにも関わらず、「ツウチヤン」という呼び声によつてお通を謙三郎の葬られた「陸軍の所轄に属する埋葬地」(第四章、四七頁)に導いた。この後、謙三郎の墓前でお通が復讐を果たすことから、琵琶が謙三郎(死者)の意思を汲むかのように行動していることが分かる。このことから、死者の意を媒介するというような怪奇的・非現実的な性格が付与されていると言える。さらに、場面③では琵琶がお通と謙三郎の情交を仲立ちする際に、琵琶が「ツウチヤン」と呼ぶように馴らされているとあつたが、この場面で自らの意思を持つてお通を導くかのように描かれており、琵琶の伝令は機械的なものではないことが分かる。お通・謙三郎の心情を媒介し、人間のような思考・行動をしていると言える。

## 【場面⑥】

最後に、「琵琶伝」終局部のお通が復讐を果たす場面を見ていく。お通は埋葬地に行きつき、そこで重隆が謙三郎の墓を辱める様子を目撃する。お通は激昂して重隆のもとに駆け寄り、重隆の咽喉を喰い破る。復讐を遂げたお通が謙三郎の墓前で「謙さん」（第五章、五〇頁）と名を呼ぶと、行方知れずの琵琶が現れる。

月青く、山黒く、白きものあり、空を飛びて、傍の枝に羽音を留めつ。葉を吹く風の音につれて、

「ツウチヤン、ツウチヤン、ツウチヤン」

と二たび三たび、笏を返して、琵琶は連に名を呼べり。琵琶は連に名を呼べり。（第五章、五〇頁、一重の傍線は省略した。）

月・山と対比して鸚鵡の白さが強調されて書かれている。さらに、お通の復讐を見届け、お通の呼び声に応えるかのよう現れ「ツウチヤン」としきりに名を呼ぶ鸚鵡は、自らの意思・感情を持って行動しているように見える。

以上の①から⑥の場面から、鸚鵡琵琶の役割・性格をまとめると（a）から（e）の五つの特徴に分類できる。以下、分類を示すとともにそれに対応する場面を付記する。

- （a） 珍重されるもの：場面①
- （b） 白色（純白）：場面①、④、⑥
- （c） 人間の言葉を真似る：場面②、③、⑤、⑥
- （d） 人間のような思考・行動をする／お通・謙三郎の情交を媒介する：場面①、③、⑤、⑥
- （e） 死者の意を体现する怪奇的・非現実的要素を持つ：場面⑤、⑥

これらの特徴を持つ鸚鵡琵琶が同時代ではどのように読み手の目に映ったのか、また先行研究でどのように評価されてきたのか。次章で整理していく。

## 二、同時代批評及び現代の先行研究の問題点

### (一) 同時代評に於ける怪奇性への批判

(e) の怪奇性・非現実性を作品発表と同時に指摘し、批判したのは『読売新聞』に掲載された内田魯庵の批評である。魯庵は「琵琶伝」を「鬼界の現象を描きしもの」とし、鸚鵡は「或る一個の因縁に由て地獄の叫喚を齎らもたさんが為に化現したる魔鳥」であると述べている。そして、「如何なる鏡花鬘屑の人も『琵琶伝』を以て傑作と考ふる事能ざるべし」と厳しく評価した(以上、魯庵生「国民之友新年附録を評す」(『読売新聞』(明治二十九年一月二十日 日就社))。『文芸時評大系』明治篇第二卷(平成十七年十一月二十五日 ゆまに書房)所収、一六六頁)。このように、お通を復讐へと導く鸚鵡の「魔鳥」的な怪奇性・非現実性は、同時代に於いて受け入れられず、批判されてきた。

さらに、本作は人物の不自然・脚色の奇怪さが問題視されてきた作品でもある。『帝国文学』には、「法螺吹の幽霊話を聞くが如く、始より嘘らしく感ぜらるゝは、蓋し出来損ひの作なるべし」と、奇怪さを理由にした酷評も見受けられる。

その一方で、不評を跳ね返し、怪奇性を推し進めることをよしとする好意的な批評も残されている。『青年文』に掲載された田岡嶺雲の批評である。

斬新奇抜深酷等のあらゆる好評は、一たび鏡花の独専に帰して自覚心なき群小が靡然として是に向はんとしたりしは、実に半歳の前に非ずや、節操なき世界ははやくも厭嫌の色を呈しぬ。(中略)然れども幽霊妖魔と云ふが如き



不自然もマク□<sup>(5)</sup>スの価値を墜すに足らざるを知らば、吾人は彼「論者注：鏡花「琵琶伝」の所謂不自然奇怪も、レッシング<sup>(6)</sup>が Der Same, sie zu glauben, liegt in uns allein」と云ひけん論法中の者に外ならざるを信ずるなり。鏡花が筆若し更に一階段を進むることを得ば、魑魅魍魎紙上に勇躍するの一大活劇、蓋し又望み得ざるに非ざるべし。吾子何ぞ半人半鬼の間に彷徨して、百尺竿頭一步を進むるの勇気を鼓舞せざる。尉官に噛み付きしお通は、大蛇となりし清姫<sup>(8)</sup>とまで思ひ切りしことの、更に利益なりしを信ず<sup>(9)</sup>。

嶺雲は鏡花の評価が、わずか半年の間に著しく変わったことを批判し、シェークスピア『マクベス』やレッシング『ハンプルク演劇論』の一節を挙げ、鏡花に期待する批評を残している。レッシングの一節はフランス悲劇に於ける幽霊の出現について、「これを信じる種子は、われわれみなの中にあり、作家がとくに創作の対象とした者のなかに、もっとも多く抱かれている」と述べた部分が引かれている<sup>(10)</sup>。さらにレッシングは「問題は、この種子を芽にする技術」であり「その実現のための根底に、すかさず活をいれるある呼吸」であると述べた（九五頁）。そして、「作家がこの呼吸をわがものにしてゐるならば、われわれは、日常生活においては、われわれの望みしだいを信じてしまうかもしれないし、劇場においては、かれの望みしだいを信ぜずいらなくなる」としたように（九五頁）、問題は不自然奇怪な要素そのものではなく、それを信じさせる技術と呼吸が作家が自分のものにしてゐるかどうかであると主張している。これを引いて、嶺雲は「鏡花が筆若し更に一階段を進むることを得ば」と鏡花の技術と呼吸が成熟するのを期待した。そして、夫に噛み付くお通を恋の妄執故に蛇に変化する道成寺説話の清姫に喩え、奇怪さを「半人半鬼」の域で留めず「一步を進むる」ようにと鏡花に望み、怪奇が鏡花にとって益があるものとなすと示した。

以上のように、同時代評に於いて本作は奇怪さを酷評されており、鸚鵡についても（e）死者の意を体现する怪奇性・非現実性は受け入れられなかった。そうした批判の中で、『青年文』のように怪奇性を評価する批評は際立っている。

嶺雲の批評については、本論文の最後に再度言及する。

(二) 先行研究に於ける怪奇性の再評価

同時代に於いて鸚鵡の（e）怪奇性が批判されてきたが、その後の研究史ではどうだろうか。先行研究内で最も多く引かれるのは、「鸚鵡が人語を解するかの如くに点出されるのも怪奇の業と映った」と指摘しつつも、「その後の鏡花文学のロマン性は、この琵琶という鸚鵡の点出にその芽生えを見ることができよう」と述べた成瀬正勝の見解である（成瀬正勝「解題」、四〇〇頁）。これを筆頭に、村松定孝は、「琵琶伝」末尾の二行をあげて「その怪奇と凄絶なる詞章に鏡花独自のロマン性の真価を認め、「清純な恋がいかなる迫害にも屈せざる強烈さをこのような様式によつて象徴している」と述べた（村松論文、八五頁）。さらに吉田昌志は、「その悲哀を奏でるのが楽器ではなくて、琵琶という名の鸚鵡である点に本作の浪漫的な独自性を見ることができるとした。<sup>1)</sup>

このように、鸚鵡に鏡花独自のロマン性を見出すことで「琵琶伝」を再評価する見解は多い。しかし、恋人同士の間交の仲立ちをし、死者の思いを体現して復讐を導く役割を持つのがなぜ鸚鵡であるのかという検討が不十分であると言える。加えて、鸚鵡琵琶は第一章で検討してきたように、様々な特徴・役割を持ってこの物語を形作る存在である。作中で果たす鸚鵡の役割が、独自性・ロマン性という言葉で曖昧になってきたことが、これらの先行研究の問題点と言えるだろう。

このほか、成瀬氏は鸚鵡が（d）人間の様に思考・行動をするという点について「鸚鵡が人語を解するかの如くに点出されるのも怪奇の業と映った」としたが、鸚鵡は古くから用いられてきたモチーフであり、鸚鵡が登場する先行作品が数多くあるにも関わらず、「鸚鵡が人語を解する」という要素に関わる先行作品の有無についての実証が無いままに、

鏡花独自の怪奇としているのも問題である。

以上の問題点を踏まえて、先行作品の中で鸚鵡はどのように描かれてきたのか、どのような部分が鸚鵡琵琶の特徴に結びついてきたのか、「鸚鵡が人語を解する」ということに関わって、恋人同士の情交を取り持つ、死者の意を体現するなどの要素に関わる典拠の有無を検討していく。それらの考証を経て、鏡花の描く鸚鵡、その独自性を明らかにできるのではないだろうか。

### 三、鸚鵡というモチーフ——古代から江戸時代までの作品から——

先行作品の鸚鵡について論じるうえで、小山順子「日本文学と鸚鵡——歌論用語「鸚鵡返し」をめぐって」<sup>(12)</sup>を参考にしたい。以下、第一章で分類した鸚鵡の特徴(a)から(e)と照らし合わせながら、先行作品での鸚鵡の描かれ方を整理していく。

まず、(a) 珍重されるものである点について見ていく。これに関わる資料として、「『日本書紀』に新羅・百濟から進献されたという記事があり(孝徳天皇大化三年・斉明天皇二年・天武天皇十四月五月二十六日)、その後も中国からの贈答品として用いられた鳥」であったことが小山氏の論で指摘されている(二〇八頁)。さらに、「献上された後、貴所で秘蔵されたため、(中略)実際にそれを目にし、耳にする機会があった人は限られていた」という事情もあり(小山論文、二二〇頁)、日本に於いて鸚鵡は見る人も限られている鳥であったという。日本・中国だけではなく「珍奇で高貴な鳥であるというのが、鸚鵡が世界で共通してもたれるイメージだった」と小山氏は解説する(二二一頁)。

次に、(b) 白である点について見ていく。『日本国語大辞典』では「緑衣」という言葉が「鸚鵡の羽のたとえ」であるとして、用例に『本朝無題詩』に於ける大江佐国「聞大宋商人献鸚鵡」の「緑衣紅背異衆禽」や、禰衡作「鸚鵡賦」

の「紺趾丹雘、緑衣翠衿」が挙げられており、このことから鸚鵡Ⅱ白と限定されていたとは言えない<sup>(13)</sup>。しかし、小山氏に拠れば古典の文献に於いて鸚鵡とインコが混同されており、生物学上の二者の区別として「おおよそ、色が白または桃色で頭に冠羽を持ち尾が短く、大型のものがオウムであり、鮮やかな体色で長い尾を持ち、体が比較的小さいものがインコである」(二〇七頁)と指摘していることから、羽毛の鮮やかさに言及している鸚鵡の文献については、インコを指していると考えられる。さらにこれに付け加えて、鸚鵡に関する文献に拠れば、鸚鵡とインコが明確に区別されるようになったのは江戸時代以降であるという<sup>(15)</sup>。また江戸時代には「中国やオランダとの貿易によって、白い鸚鵡やインコ、九官鳥などの様々な鳥類が輸入され」ており、珍鳥として経済的に余裕のあった大名層の武士たちが有していたこと、一般の人々が輸入鳥を見ることが出来る唯一の機会であった見世物が人気を博していたことが解説されている<sup>(17)</sup>。以上のような鸚鵡の輸入の状況に加えて、伊藤若冲をはじめとする白い鸚鵡の絵画が江戸時代に描かれていることから、「琵琶伝」に於いて白い鸚鵡が描かれていることには特段の独自性は見いだせない。

次に、(c) 人真似をする点について見ていく。小山論文(二〇七頁)で指摘されているように、『枕草子』三九段には、「鳥は こと所のものなれど、鸚鵡いとあはれなり。人の言ふらむことをまねぶらむよ。」<sup>(19)</sup>という一節がある。また小山氏は、十二世紀には歌論用語の「鸚鵡返し」という技法が周知されていたことを指摘し、人真似をするという性質は主に日本に於いて古くから注目されてきた鸚鵡の特徴であったとしている。

次に、(d) 人間のような思考・行動をする点について見ていく。これは、中国の文献に見られる鸚鵡の特徴と一致する。

鸚鵡が「能言」鳥であるというのは、『礼記』(第一・曲礼上)の「鸚鵡能言、不離三飛鳥」を踏まえる。以後、中国では「能く言ふ」鳥として描かれる。(中略) こうした描写は、鸚鵡が人まねをするのではなく、自身の能力

でもって人語を操ると認識されていなければ登場しないものだ。(小山論文、二〇八頁)

主に中国に於いて、単なる人真似では無く、自身の能力で人語を操ることが注目されてきたという。このように、「鸚鵡が人語を解する」という要素に関わる先行文献の存在は確認できるが、恋人同士の情交の仲立ちをするといった役割は、ここからは見出せない。

次に、(e) 死者の意を体現する怪奇的・非現実的要素を持つ点について見ていく。仏典に於いて「鸚鵡が安息国の王・大臣から食べ物問われ、自分を養おうとするなら「阿弥陀仏」と唱えるようにと答える」と言われていると小山氏の論に指摘があり(二〇九頁)、この安息国の故事は中世に広く流布したものである<sup>(22)</sup>。また、小山氏に拠れば『阿弥陀経』に於いて浄土に鸚鵡が登場しており(二一〇頁)、さらにこれに付け加えて観音図中で白い鸚鵡が描かれていることから<sup>(24)</sup>、仏教に於いて鸚鵡は浄土にいる鳥であるという認識の存在が窺われる。しかし、死者の意を媒介するという要素との繋がりは認められるものの、鸚鵡琵琶のように死者の意思を汲むかのように行動し、ヒロインの復讐を導くといった怪奇・幻想的な要素までは読みとれないだろう。

以上の先行作品から、鸚鵡は異国からもたらされる(a) 珍奇で高貴な鳥であり、体色はおおよそ(b) 白く、日本では(c) 人語を真似、中国・インドでは(d) 自身の能力で人語を解し言を操る力を持っている、という四点の特徴を、鸚鵡琵琶が踏襲していることが分かった。一方で、本章で取り上げた資料に見られなかった鸚鵡琵琶の特徴は、(d) に関連して恋人同士の情交の仲立ちをし、(e) 死者の意を体現する怪奇的な要素を持っているという二点である。

では、鏡花はどのようにしてこれらの着想を得たのか。鸚鵡「琵琶」の典拠について、先行研究で既に提示されている三つの説を次章で検討し、新たな典拠を探る。その際、本章で取り上げた資料に見られなかった鸚鵡の特徴に加え、鸚鵡になぜ「琵琶」という命名がなされているのか、その理由についても紐解いていこう。

#### 四、「琵琶」という命名、その典拠

本章では「琵琶伝」の鸚鵡琵琶に於ける、その描かれ方と命名の先蹤となった作品について、従来提出されている説をそれぞれ検討していくとともに、新たな典拠の可能性を提示したい。

##### (一)これまでの鸚鵡琵琶の典拠に関する指摘

「琵琶伝」の鸚鵡の典拠に関する説としては、第一に吉田昌志による尾崎紅葉「やまと昭君」説がある。吉田氏はその理由に「第一に、意を得ぬ結婚を強いられた女の悲劇が共通する点、第二に、その悲劇を脚色する素材として鸚鵡が登場する点」<sup>(25)</sup>を挙げた。さらに、「やまと昭君」の表紙絵【図版②】に鸚鵡と琵琶が描かれていることから、「琵琶伝」と「やまと昭君」には王昭君の故事が共通のイメージとなったと解説している。吉田氏が指摘しているように、両作品に於いて、想い人が居ながら親の命によってヒロインが意に添わぬ結婚をする点、また、結婚後も打ち解けず良人に身を許さないという点が一致している。さらに鸚鵡が登場するという点も



【図版②】山梨大学附属図書館近代文学文庫蔵『やまと昭君』表紙絵

共通しており、紅葉と鏡花が師弟関係であったことから「琵琶伝」が「やまと昭君」の影響下にあることは否定できない。しかし、「琵琶伝」の鸚鵡琵琶と「やまと昭君」の鸚鵡では、鸚鵡に付されている性格や作中で果たす役割に大きな違いがあるのではないだろうか。以下、第一章で分類した鸚鵡琵琶の特徴に照らし合わせて作品を比較していく。

まず、鸚鵡琵琶が(a)珍重されるものである点について、「やまと

昭君」の鸚鵡は高価な輸入鳥として登場していることから、両作品に共通している特徴であると言える。しかし、(b) 白い(純白)という点は、「琵琶伝」の本文中で鸚鵡琵琶の白さが何度も強調して描かれていたのに対し、「やまと昭君」では表紙絵【図②】に色刷りで白い鸚鵡が描かれているものの、作品本文中に鸚鵡が白いという記述は見られない。また、(c) 人間の言葉と真似るといふ点について、「やまと昭君」の鸚鵡は教えられなくても聞いた言葉を即人真似することができるといふ能力を持つとされているが、「琵琶伝」の鸚鵡琵琶は「ツウチヤン」以外の言葉を作中で口にするのではない。さらに、鸚鵡琵琶の肝心の特徴であった(d) 人間のような思考・行動をし、主人公同士の情交を媒介するといふ点については、「やまと昭君」の鸚鵡はヒロインが厭う人物の持ち物であり、ヒロインとその想い人の恋を仲立ちするように設定されていないことから、「琵琶伝」の鸚鵡琵琶の役割の最も重要な点が一致していないと言える。さらに、(e) 死者の意を体现する怪奇的・非現実的要素を持つという点に於いて、「やまと昭君」の鸚鵡の「親鳥」が「神通」の持ち主と設定されている点に怪奇性・非現実性として共通点が見られるものの、鸚鵡が死者の意を受けて行動しているかのような怪奇的要素は見られない。以上のような鸚鵡の描かれ方に加え、「やまと昭君」の鸚鵡が物語展開の中で果たす役割は、主の留守中に聞いた言葉を喋り意図せず告げ口をすることによって、主の思う女性(ヒロイン)が姦通の疑いをかけられ殺害されるというもので、「琵琶伝」と「やまと昭君」では鸚鵡の果たす役割が大きく異なっていると見える。以上のことから、「琵琶伝」の鸚鵡の描き方については「やまと昭君」を踏襲しているとは言えない。

第二に、越野格による「悼侍兎」説が挙げられる。越野氏は尾崎紅葉「やまと昭君」説に賛同しながらも、「悼侍兎」という蔡確の詩を新資料として提示している。

#### 悼侍兎

鸚鵡言猶在，琵琶事已非。傷心瘴江水，同渡不同歸。

《侯鯖錄》：蔡持正謫新州，侍兒從焉，名琵琶，常養一鸚鵡，甚慧。丞相呼琵琶，即扣一響板，鸚鵡傳言呼之。琵琶逝後，誤扣響板，鸚鵡猶傳言，丞相大慟，感病不起，嘗為詩云。<sup>27)</sup>

「悼侍兒」という宋詩は「趙令時『侯鯖錄』卷二に「蔡持正鸚鵡詩」、胡仔『茗溪漁隱叢話前集』卷第六十に「琵琶」として収められており、日本でも広く流布したものであるが、「泉鏡花藏書目録」には含まれていないという（越野論文、四三頁）。越野氏は鸚鵡琵琶について、「紅葉の鸚鵡とは違った機能、趣向で書かれ」（四七頁）ており、「琵琶伝」は「伝令」としての鸚鵡「琵琶」、その「琵琶」が伝える「お通」の物語である（五九頁）として、この詩に「琵琶伝」と同質の登場人物の関係性が登場していると指摘した。「悼侍兒」では侍兒に「琵琶」という命名がなされており、また、引用箇所傍線部について鸚鵡が（d）主人公同士の情交を媒介するという点が鸚鵡琵琶と一致している。しかし、越野氏自身が「これらの詩文を鏡花が読んだ可能性がないわけではない、そのことは確信したが、それ以上は追求しなかった」、「根本的に実証性を欠く」と述べているように（六〇頁）、鏡花が実際に見た資料とは言えないことから、典拠としては不十分である。さらに、越野氏の論では鸚鵡琵琶が「従兄妹同士の「情交」の仲立ち、伝令」（五一頁）をするという（d）の特性に関する検討が主としてなされており、それ以外の特性については詳細な分析が無く、鸚鵡琵琶について十分に検討されているとは言えないだろう。

そして第三に、今橋理子の楊貴妃言説がある。今橋氏は、白鸚鵡が「楊貴妃が愛玩する「雪衣女」という名の鸚鵡」<sup>28)</sup>であり、楊貴妃という伝説的な（悲劇の美女）を想起させるモチーフであるとした。さらに今橋氏は、紅葉や鏡花は中国の古典文学に大きな影響を受けているにもかかわらず、これまでの先行研究にこれらへの言及がない点を指摘している（四七頁）。今橋氏は「琵琶伝」の鸚鵡について「人間のごとく言葉を理解し、同時に恋人たち（ヒロイン）「お通」と



その恋人「謙三郎」の心のやりとりを仲立ちするという役割を果たしている（四三頁）として、（d）の特性に言及しているものの、鏡花が鸚鵡を用いた意図については「薄倖の美人」あるいは「悲劇の美女」という記号性を発する「白鸚鵡」と「琵琶」という素材を、自らの小説中においては「一羽の白鸚鵡に「琵琶」と名付けて登場させることで、その悲劇性を倍加させることを狙った」（四七頁）と指摘し、更に別の論文で楊貴妃と雪衣女のエピソードを詳しく解説している。今橋氏は「唐時代（九世紀半ば）の鄭処海著『明皇雜録』に記載されるものが最も古いという」ことを紹介し、これらの故事の日本への輸入は「樂史（宋時代、九三〇〜一〇〇七）著の『楊太真外伝』の一節も見逃すことはできない」とした。<sup>(29)</sup>『楊太真外伝』については以下の一節が引用されている。

広南進<sub>二</sub>白鸚鵡。洞<sub>三</sub>曉言詞、呼<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>雪衣女。一朝飛<sub>上</sub>妃鏡台上、自語。雪衣女昨夜夢<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>鷺鳥所<sub>レ</sub>搏。上<sub>レ</sub>令<sub>三</sub>妃授遂<sub>三</sub>瘞<sub>二</sub>於苑中、呼<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>鸚鵡塚。<sup>(30)</sup>

雪衣女と名付けられた白鸚鵡は、楊貴妃の鏡台に登り、自ら「鷹につかまった」と夢見の話をしている。その予言の通り鷹につかまり雪衣女は亡くなった。帝と楊貴妃は嘆息したが、しばらくして御苑に鸚鵡を埋め鸚鵡塚と名付けたそうである。雪衣女は（b）白鸚鵡で、（e）に関連して予言という不可思議な特色をもっているという点で鸚鵡琵琶と共通しているが、鸚鵡琵琶の肝心な特徴（d）は見出せない。さらに、指摘されている雪衣女の逸話が採録されている文献は、鏡花の蔵書目録に無いことから典拠の論として不十分である。

以上の三つが「琵琶伝」の鸚鵡に関する先行研究である。「琵琶伝」の先蹤作は尾崎紅葉の「やまと昭君」だとほぼ確定的に見られてきたが、近年新たに宋詩や楊貴妃言説との関連が指摘されている。それぞれの論が指摘する文献に見られる鸚鵡は、鸚鵡琵琶の持つ特色・役割について作品本文との対照が不十分であり、また典拠とされる文献そのもの

を鏡花が見たことが論証できていない。以上のような観点から、「琵琶伝」の鸚鵡に関する典故の確定に至っていないと言えるだろう。

## (二) 『新語園』の鸚鵡

前節で挙げた従来の説と問題点を踏まえ、ここで、「琵琶伝」の典故となつたと思われる新資料を提示したい。以下に全文を引用する。

二十九鸚鵡呼<sup>ヨフ</sup>琵琶<sup>ビハ</sup>

青林詩話

蔡確<sup>サイサイ</sup>ト云フ人罪アリテ新州ニ貶謫セラル嘗テ侍兒<sup>ジチ</sup>アリ琵琶ト名ク能ク事テ主ノ意ヲ知りタル者ナリ是ニ由テ配所マデモ随<sup>シカ</sup>ヒ赴ク又一ツノ鸚鵡アリ甚ハタ聡ク慧カリシ確公<sup>ツキ</sup>毎ニ響板<sup>ケイハン</sup>ヲ扣テ琵琶ヲ召バ鸚鵡必ズ其ノ名ヲ呼伝テ琵琶ヨト云フ家中皆是ヲ愛シテ飼ケルニ琵琶既ニ病<sup>ヤビ</sup>シテ配所ニシテ死ケリ其後此ノ鸚鵡カ意口ニ此ノ侍兒カ死テ見エザルヲ憂焦テ朝夕<sup>テウセキ</sup>毎日琵琶ヨト呼テ悒々トシテ楽マズ蔡確是ヲ見テ哀<sup>アハ</sup>ナルコト心口ニ徹<sup>トウ</sup>ケレハ詩アリ曰ク鸚鵡言猶在琵琶事<sup>レ</sup>已非傷<sup>レ</sup>心瘴江水同渡不<sup>ニ</sup>同帰<sup>ニ</sup>矣又將<sup>シヤキ</sup>帰賦ヲ送ル蔡確モ幾クナラズシテ配所ニシテ卒<sup>ス</sup>スト云フ<sup>(31)</sup>

引用したのは、『新語園』に掲載されている三つの鸚鵡の逸話のうちの一つで、「鸚鵡呼琵琶」と題されたものである。内容に触れる前にまず、この資料がどのようなものであるかを確認していく。

『日本古典文学大辞典』に拠れば、『新語園』は「十卷十冊。教訓。浅井了意著。延宝九年（一六八一）二月成立（自序）。天和二年（一六八二）二月、梅花堂梶川常政小佐治宗貞ら刊。（中略）漢籍の一々をすべて掲げて出典を示しつつ、人物・山岳・自然・鳥獸等の奇談・説話を仮名混り文に書き下したものと書かれている。さらに、『新語園』は「泉鏡花蔵書目録」の【日本の部】に含まれていること<sup>(32)</sup>から、実際に鏡花が目にしてきた資料であると言えるだろう。中国

文学と鏡花作品の關係性を論じた須田千里氏の先行研究の中では、「聞きたるま、」と「唐模様」の二作品が『新語園』に抛るとされている。<sup>(34)</sup>さらに、井上円了「妖怪学講義」の「参考書目拾遺」に名前が見えることから、明治二十年代に流通していたと言える資料である。<sup>(35)</sup>

さて、内容に目を向けると、前節で挙げた「悼侍兒」と類似したものであることが分かる。琵琶は、新州に貶謫された蔡確の愛妾で、鸚鵡は「甚ハタ聡ク慧」く、蔡確は琵琶を召す際に響板を叩くと、鸚鵡は琵琶よと愛妾を呼んでいた。琵琶が病で亡くなると、鸚鵡は琵琶の姿が見えないのを憂い焦がれて、朝夕毎日琵琶よ琵琶よとその名を呼んだ。それを見た蔡確も哀しみ、「鸚鵡言猶在琵琶事已非傷心瘴江水同渡不同帰」と詩を詠んで配所にて亡くなったという。

「琵琶伝」では謙三郎とお通の間を琵琶の「ツウチヤン」という呼び声で仲介していることと同様に、「鸚鵡呼琵琶」は蔡確と琵琶の間を鸚鵡の「琵琶よ」という呼び声で仲介していることから、鸚鵡が（d）恋人同士の情交を媒介する点が一致している。さらに、「琵琶」という命名について、「鸚鵡呼琵琶」では愛妾、「琵琶伝」では鸚鵡に、「琵琶」と名付けられている。以上のことから、「鸚鵡呼琵琶」と「琵琶伝」では、本論第三章で見た文献では一致しなかった（d）恋人同士の情交を仲立ちするという役割と、「琵琶」という命名の二点が共通している。

そのほか、鏡花が強調していた（b）白（純白）である点と、第三章で取り上げた文献で一致しなかった（e）の特徵に関連して不可思議な能力を持っているという点については、『新語園』所載の「鸚鵡語夢」<sup>(36)</sup>という逸話にその特色を見ることが出来る。

「鸚鵡語夢」に登場する鸚鵡は、玄宗と楊貴妃が寵愛し雪衣娘と名付けられた白鸚鵡であり、この逸話は『明皇雜録』から採録したことが『新語園』に明記されている。鏡花は『明皇雜録』そのものに拠ったのではなく、『新語園』を介して雪衣娘の逸話を知ったのではないだろうか。「鸚鵡語夢」の内容は、大まかには今橋氏が指摘している『明皇雜録』

や『楊太真外伝』と同じものである。雪衣娘は「人ノ言学バズト云コト無ク能ク先立テ人ノ意ヲ知ル」(『鸚鵡語夢』(巻七・第二四丁裏))とされ、自らが鷹につかまると夢で予知して、その通り鷹につかまって亡くなったという。以上のように、「鸚鵡語夢」の雪衣娘は、(b)白で、(e)に関連して予知という不可思議な特色をもっているという点で、「琵琶伝」に通ずるものが認められる。「琵琶伝」本文では鸚鵡琵琶の(b)白を強調する描写として、第一章場面④で「樹間の雪」を引き合いに出していることから、雪衣娘のイメージが関連しているようにも取れる<sup>37)</sup>。

また、『新語園』にはこの二作のほかに、「鸚鵡悲上皇崩<sup>38)</sup>」という鸚鵡の逸話があることを紹介しておく。徽宗皇帝の時代に貢物として献上され、その後本土に放たれ還された白鸚鵡と紅鸚鵡は、「徽宗皇帝ハ安泰ニ御在力<sup>39)</sup>」と人に尋ね、「上皇は去ヌル頃ニ崩御ナリシ」と答える(『鸚鵡悲上皇崩』(巻七・二八・第二五丁表))と、鸚鵡は悲しみ鳴いたという内容である。(d)と同様に、人間と同じように感情によって動く鸚鵡の姿が描かれている。

以上三作品が『新語園』に描かれる鸚鵡の逸話である。『新語園』では、「琵琶」という命名、(d)恋人同士の情交を仲立ちすること、(e)に関連して予知という不可思議な能力を持つこと、という、第三章に挙げた資料には見られなかった鸚鵡琵琶の特色や、鏡花が強調して描いた(b)白い鸚鵡である点が共通していた。『新語園』は、先行研究で既出の「悼侍兎」、「明皇雜録」、「楊太真外伝」とは異なり、蔵書目録から実際に鏡花が見ていると言える資料であり、さらに、『新語園』を創作の素材として用いていたという指摘もある。『新語園』を介して鏡花はこれらの逸話を知り、「琵琶伝」の鸚鵡琵琶の造形に活かしたのではないだろうか。

このように鸚鵡琵琶に見られた特色の殆どの部分が『新語園』収録話を踏まえていることが分かるが、その一方で、(e)について「鸚鵡語夢」の雪衣娘が予知という不可思議な能力を持つ点は鸚鵡琵琶に通じているものの、死者との交感・死者の意を媒介し、ヒロインを復讐へ導くといった怪奇的要素までは読み取れない。第一章でとり上げた場面⑤で、琵琶

琵琶がお通を導く場面が「黄昏」時である点も、その怪奇性を際立たせる要素である。

同時代に「魔鳥」と糾弾されたような鸚鵡琵琶に於ける、(e)の怪奇性はどこから来たものであるのか。また、鏡花の独創であるのか。本章では、同時代資料を用いて当時の鸚鵡について検討したい。

##### 五、鸚鵡というモチーフ——同時代資料から——

同時代資料から鸚鵡について検討するにあたって新聞記事や、『風俗画報』『文芸倶楽部』『校友会雑誌』『美術新報』などの雑誌記事を調査した。以下、第一章で分類した鸚鵡の特徴(a)から(e)と照らし合わせながら、同時代の鸚鵡についての文献を整理していく。

まず、(a)珍重されるものである点について見ていく。『読売新聞』には常宮周宮つねのみや両内親王殿下が愛育された鸚鵡が病気で倒れたために剥製として高輪御殿に納めたという記事が見られ(『読売新聞』朝刊(明治三十九年十月二十四日 日就社)三面)、同時代に於いても、高貴で珍重される鳥であるというイメージは共通しているように取れる。一方で、鸚鵡が高価な飼育用の鳥で、その相場について述べられた記事が多いこと39から、見る人も限られた古代から江戸時代より身近になったことが分かる。

次に、(b)色について見ていく。『東京朝日新聞』では「近來又禽鳥類にて羽毛の珍なるをめづる者多く鸚鵡、きんこ、孔雀、金鶏類など高価になれり昔は唯其声を聴きて娛しみし者多く今は其形を見ざれば得心せざる者多し」(『東京朝日新聞』朝刊(明治三十一年八月二十三日 東京朝日新聞社)四面)と述べられているように、鸚鵡の声から外見の珍しさへと大衆の関心が変わってきているようである。傍線部のように近代に於いて鸚鵡の羽毛の色は白と限定されておらず、鸚鵡が珍しい鳥で正確な情報が得にくい状況にあったこともあり、色鮮やかなものという一般的なイメージは存在して

いるように取れる。

次に、(c) 人真似をするという点について見ていく。『文芸倶楽部』等から鸚鵡に関する記事を見ていくと、「鸚鵡石」について描かれたものが非常に多い。<sup>40)</sup>『日本国語大辞典』に拠れば、人語を真似るという性質から「鸚鵡返し」「鸚鵡石」などの語もできたと言われているように、主に日本に於いて注目されてきた(d) 人語を真似るという鸚鵡の特徴から派生した要素である。同時代以前にも「鸚鵡石」という言葉は見られており、『角川古語大辞典』に拠れば「書名に鸚鵡石を冠したのは、明和九年(一七七二)刊の『物真似狂言尽鸚鵡石』が初めだ」という。<sup>41)</sup>

次に、(d) 人間のようには思考・行動するという点について見ていく。『読売新聞』の「鸚鵡の行く衛」という記事には、人間のように振る舞う鸚鵡の姿が描かれている。谷中あたりに住む青年画家は、鳥花画研究のために鸚鵡を飼い置いていた。青年が籠の戸を開け忘れると「愉快気に伝ひ遊びて」飛び去った。青年は忌々しく思い銃殺を思案するも叶わず、日は暮れて鸚鵡の行く末を気遣い「来いよ帰れ」と呼べば、「鸚鵡は呑気にも片言交りに「左様なら」の一語を残して鬱鬱たる木の間深くかくれ」たそうである(以上、『読売新聞』朝刊〈明治三十五年一月十六日 日就社〉四面)。鸚鵡の行動から人間が感情を読み取っている点の特徴(d)と一致している。

次に、(e) 死者の意を体現する怪奇性・非現実的要素について見ていく。『読売新聞』には、「鸚鵡能く人間の死期を知る」という記事があり、その記事に拠れば本所区緑町に住む老婆の飼う鸚鵡は「子じめ人の吉凶禍福を知り特に其の死生の期を告ぐるに百中せずといふことなしとの噂」で、人の死期を予言する能力を持っていると書かれている(『読売新聞』朝刊〈明治二十七年四月十三日 日就社〉三面)。この能力は、『新語園』の「鸚鵡語夢」に見られたような自身の死を夢で予期する能力に類似している。さらに、(c)で指摘した「鸚鵡石」に関する記事には、奇談として描かれたもの<sup>42)</sup>があり、さらに、「琵琶伝」発表後には巖谷小波や石川淳が「鸚鵡石」を扱った作品を書いていることから、「鸚鵡石」

という音の反響する奇妙な右について、怪奇・幻想の方向へ進む流れがあることが分かる。

ここまで(a)から(e)の五つの特徴について同時代のイメージを見て来たが、このほか、鸚鵡に関する雑誌記事を確認していくと、第一高等学校校友会から発行された『校友会雑誌』に、鏡花と関連深い人物である柳田国男<sup>(4)</sup>が、「琵琶伝」発表の二年前に「鸚鵡」というタイトルの小文を投稿していることが分かった。内容に目を向けると、語り手の友人は、父が亡くなったために世渡りの頼りが無いことを憂いて、老いた母と鸚鵡を残し亡くなった。友人の死後に、鸚鵡が「後藤さん、後藤さん<sup>(6)</sup>」と、父が居た頃よく家に訪れた人の名を呼ぶ姿や、鸚鵡の声に動かされ、友人の母と昔話をしに家に立ち寄る語り手の姿が描かれている。柳田と鏡花の関係性の深さから、「鸚鵡」という小文を鏡花が見ていた可能性も指摘できる。

そのほか、『東京日日新聞』の「鸚鵡」という記事には、埼玉県浦和公園地内の調神社の神官山田明真氏が飼う鸚鵡について、「支那産のよしなるが尤も靈慧<sup>(れいけい)</sup>にして能く文字を解し又た善く俚語<sup>(りご)</sup>を諷ふと云ふ上皇を問ひ琵琶を呼ぶにも優りぬべし」と書かれている(『東京日日新聞』朝刊〈明治十七年五月三十一日 日報社〉五面)。ここで引き合いに出されている「上皇を問ひ琵琶を呼ぶ」という鸚鵡は『新語園』の「鸚鵡悲上皇崩」と「鸚鵡呼琵琶」に見える鸚鵡であると取れる。この記事が明治十七年のものであり、「琵琶伝」が発表された明治二十年代以前に『新語園』に掲載された逸話が流通していたことが推測できる。

以上、同時代資料に描かれる鸚鵡について見て来た。同時代では鸚鵡が(a)高価な飼い鳥で且つ高貴なイメージを持っており、(c)人真似をするという性質から出来た「鸚鵡石」の記事について、前時代に見られたものが同時代に於いても取り上げられていた。さらに、(d)人間のように自ら思考・行動する鸚鵡の姿が見られる。この三点に於いて、鸚鵡琵琶の特徴と一致した。

一方で、近代に於いて鸚鵡は（b）白色とは限定されておらず、色鮮やかなものという一般的なイメージが存在していた中で、「琵琶伝」の鸚鵡の白色は明確に描かれており、『新語園』の設定と一致している。そして、（e）怪奇性について、同時代に於いても予言という不可思議な能力、「鸚鵡石」の奇談などが見られたものの、「琵琶伝」に於ける怪奇性に届くものがあるとは言えない。これまで見て来た古代から江戸時代までの作品・同時代資料・『新語園』からの考証を経て、（e）死者との交感・死者の意を体現してヒロインを復讐に導くという怪奇について、鏡花の独創であると言えるのではないか。

鏡花は、明治二十八年には「夜行巡査」、「外科室」等で観念小説の作者として文壇で華々しく取り上げられるようになった。明治二十九年の「琵琶伝」も、観念小説期の作品と言われている。しかし、鏡花は明治二十七年の「黒壁」<sup>47</sup>、明治二十八年の「妖怪年代記」、「黒猫」といった作品に於いて、初期から怪奇性の濃い作品を描いており、「琵琶伝」発表と同年の明治二十九年に於いても「蓑谷」や「龍潭譚」などから怪異への志向が読みとれる。鸚鵡琵琶について、江戸時代以前の作品の鸚鵡から窺える死者との繋がり、『新語園』に見られる予知という能力、同時代資料に見られる死期の予言などの不可思議な要素に鏡花独自の性格が反応し、死者の意を体現して復讐を導くという独自の怪奇を鏡花が打ち出すに至ったと推測できるだろう。江戸時代以前の作品・同時代資料をはじめとして、典拠として新しく提示した『新語園』等の摂取と、鏡花独自の怪奇への志向によって、鸚鵡琵琶は生み出されたのではないだろうか。

### おわりに

「琵琶伝」は、鸚鵡琵琶の悲劇を引き起こす魔鳥とも言われる怪奇的・非現実的な性格が従来指摘されてきたこと、奇怪さが厳しく評価されてきたことは第二章で示した。このような批判の中、『青年文』の田岡嶺雲は、鏡花の不自然



奇怪を「半人半鬼」と称して更なる一階段を経て「魑魅魍魎紙上に勇躍するの一大活劇」へと思い切る勇気を鼓舞し、鏡花の怪奇性を推し進めることを望む批評を残している。本論文で見て来たように、同時代に批判された怪奇性の付与こそが鏡花の独創であるならば、この批評は「琵琶伝」の核心をつくものであり、奇怪さへの非難、明治三十年代後半からは自然主義の隆盛の中でありながらも生涯にわたって幻想・怪奇の世界を描き出していく鏡花にとって、大きな足掛かりとなったことだろう。

鏡花作品のうち、観念小説から幻想小説への転機となった作品には、「龍潭譚」（明治二十九年）や「照葉狂言」（明治二十九年）などが挙げられるが、本作で既に怪奇・幻想への兆しが見られること、嶺雲の批評なども後押しとなって、その後幻想作家としての道筋へと舵を切ったのなら、「琵琶伝」は鏡花の作品史上の転機となった作品と言えるものである。本論文では、鏡花がどのような典拠を用いて怪奇・幻想を生み出したのか、その道筋を辿る一端に迫ることができたのではないだろうか。

しかし、今回指摘したような典拠に無いものこそが鏡花の独創であるならば、怪奇性という鏡花の特色についてはさるなる源泉への調査が求められる。また、今後さらに江戸・明治の作品を広く見て怪奇性を論証することが必要となるだろう。そのほか、鏡花の他作品に登場する鸚鵡についての調査も含め、今後の課題として本論文の締め括りとする。

## 注

- (1) 『国民之友』第二七七号（明治二十九年一月四日）初出。引用は『国民之友』第一八卷（I）（明治四十二年七月十五日 明治文献）に拠る。以下、引用にあたっては初出誌の頁数のみを示す。※引用全般に際し漢字の旧字体・変体仮名は通行の字体に改め、ルビは適宜省略し、傍線部は論者が付した。

- (2) 成瀬正勝「解題」(『明治文学全集二』 泉鏡花集(昭和四十一年九月十日 筑摩書房) 三九九頁。以下、成瀬正勝「解題」と略記し、『明治文学全集』所載の頁数のみを示す。
- (3) 村松定孝「泉鏡花——「琵琶伝」と「海城発電」」(『解釈と鑑賞』三七卷一〇号(昭和四十七年八月 至文堂) 八四頁。以下、村松論文と略記し、掲載誌の頁数のみを示す。
- (4) 無署名「国民の友の新年附録」(『帝国文学』(明治二十九年二月十日 帝国文学会)。「文芸時評大系」明治篇第二卷、一九一頁。
- (5) 原文で空白になっている箇所(罫字)は□で示した。嶺雲は、シェークスピア四大悲劇と言われ、三人の魔女の予言を信じて主人公が翻弄される作品である『マクベス』を挙げて、不自然さや奇怪さで作品の価値は失墜しないと述べている。佐々木隆「日本における『マクベス』」(『武蔵野短期大学研究紀要』第一二輯(平成十年六月二十五日 武蔵野短期大学)に拠れば「日本で『マクベス』が本格的に紹介されたのは明治十八年(一八八五)七月十日(十二日、十五日)十八日にわって『郵便報知新聞』に連載された藤田茂吉訳『榮枯の夢』であろう。(中略)比較的早い時期にシェイクスピアの原文からはっきりとした翻訳に取りかかったのは坪内逍遙で、明治二十四年(一八九一)十月から『早稲田文学』誌上に「シェークスピア脚本評注」として、明治三十年(一八九七)六月からは『国学院雑誌』誌上へ『マクベス』の評釈を連載した」(八九頁)と解説されていることから、明治二十年代に於いて坪内逍遙を中心に翻訳が行われている。
- (6) 明治二十年代頃にレッシングの記述が見られる資料として、巖谷小波・霧山人編『独逸文壇六大家列伝』(明治二十六年三月二十日 博文館)がある。同書ではレッシングについて「ゴットホルド、エフライム、レッシング氏は、千七百二十九年一月二十二日、オーベルラウシッツの一小市カメンツに於て生」(三六頁)まれ、「氏は元より独逸主義演劇を賛成するものなれば、(中略)独りHamburgische Dramaturgie(ハムブルグ演劇誌)を發刊して、全力を之に捧げたり」(六三頁)と述べられており、「ハンプルク演劇論」等の評論を發刊したドイツの劇作家・評論家として紹介されている。また、井上円了『宗教哲学』(明治二十七年 哲学館 ※出版年は「哲学館第六学年度講義録」の国立国

会図書館デジタルコレクションの書誌情報に拠る)に「独逸ノレッシング」(八頁)が紹介されている。また、森鷗外は「レッシングが事を記す」(「しがらみ草紙」(明治二十四年六月―九月))でレッシングを紹介しており、東京大学の「隅外文庫書庫書人本画像データベース」<https://iit.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogai/document/a99a4885-bdbc-41d0-98b-e77920783321#?c=0&m=0&s=0&cv=0&xywh=1%2C896%2C5234%2C518>に公開されているハイブリッド・クルツ編『レッシング全集』(二八七四年)に於いて、第三巻の「ハンブルク演劇論」には「作表裏評／忍月／色懺悔」と鷗外が書き入れていることから、この作品が鷗外や忍月などの明治二十年代の作家たちに強く意識されていた様子が見て取れる。

(7) レッシング『ハンブルク演劇論』第一一号(一七六七年六月五日)の一節。「これを信じる種子は、われわれみなものなかにある」という意味。明治二十年代には坪内逍遙が『梨園の落葉』(明治二十九年十一月二十三日 春陽堂)に於いて、「レッシングが『ハムレット』の劇に就いていへる所は、やがて移して一切の劇の上にいふべし。誰れかもはや人間に不思議の事物なしといふぞ、誰れか亡霊を信ぜず、とふぞ、彼等白昼には亡霊のあるまじきを説けども、深夜怪談を聴いては心ひそかに怕るゝにあらずや。よしや一步を譲りて超自然の事物はあるべからざるものなりとするも、人の心中に迷執の素の存する限は、詩人の之れを利用するに、何のひがことかあらん、議すべきはそれを描画するの法のみならん」(一四三頁)として、同様の考え方を述べている。『ハンブルク演劇論』のレッシングの発言が、同時代の文壇で共有されていた可能性が考えられる。

(8) 明治二十年代には早川賢讓編『きよ姫・連夜説教』(明治二十七年十月六日 其中堂書店)に清姫の説話がまとめられており、編輯兼出版人沢久次郎『安珍清姫譚 下』(明治二十年一月)などの絵入り本も見られる。

(9) 青年文記者「時文」(『青年文』三巻一号(明治二十九年二月十日 少年園))。『文芸時評大系』明治篇第二巻所収、一八六頁。

(10) レッシング『ハンブルク演劇論』第一一号(一七六七年六月五日)。レッシング著奥住綱男訳『ハンブルク演劇論』(上巻) (昭和四十七年五月十三日 現代思潮社) 所収、九四頁。以降の『ハンブルク演劇論』の引用もすべて右に拠る。

- (11) 吉田昌志「解説『琵琶伝』『照葉狂言』『辰巳巷談』」(『泉鏡花集 新日本古典文学大系明治編二〇』)〈平成十四年三月十八日 岩波書店〉 四六七頁。
- (12) 小山順子「日本文学と鸚鵡——歌論用語「鸚鵡返し」をめぐる」(河添房江・皆川雅樹編『唐物』とは何か 舶載品をめぐる文化形成と交流)〈令和四年十月十七日 勉誠出版〉。以下、小山論文と略記し、頁数のみを示す。
- (13) ジャパンナレッジ「『日本国語大辞典』(令和四年十二月四日 閲覧)。
- (14) 小山氏に拠れば「鸚鵡」の語は古代から用例が見られるが、「鸚哥インゴ(または音呼)」の用例は中世以後であり、古典の文献に於いては「鸚鵡」の語で記されているとしても、現在インゴと呼ぶ鳥も含まれている(二〇七頁)という。
- (15) 「江戸時代に至るまで、「鸚鵡」と「鸚哥/音呼」は明確に区別されることなく使われてきた」(細川博昭『江戸時代に描かれた鳥たち 輸入された鳥、身近な鳥』〈平成二十四年二月十六日 ソフトバンク・クリエイティブ〉三五頁)。
- (16) 鈴木京「伊藤若冲筆《鸚鵡図》に関する一考察——肖像画としての解釈の可能性について」(『藝叢』第二四号)〈平成二十年三月一日 筑波大学大学院芸術学研究室〉一六八頁。
- (17) 「一般の人々にとって輸入鳥の飼育は経済的に難しいものであったが、そうした高価な鳥類を目にすることはできた。その唯一の機会が鳥類の見世物であった。中でも鸚鵡や孔雀のような輸入鳥は「唐鳥」あるいは「名鳥」と呼ばれ人気の高い部門であった」(同右、一六八頁)。
- (18) 一羽の白い鸚鵡と止まり木が描かれている若冲作《鸚鵡図》は現在五点確認されている。鈴木氏は「若冲が《鸚鵡図》を描いたと推定される宝暦三年(一七五三)から宝暦七、八年(一七五七、五八)は、まだ鸚鵡を身近に見ることのできる時代ではなかったと考えられる」(同右、一六九頁)と解説している。
- (19) 三卷本系統第一類本の陽明文庫蔵本、第二類本の相愛大学・相愛女子短期大学図書館蔵の弥富破摩雄氏・田中重太郎氏旧蔵本を底本とした『新編日本古典文学全集一八 枕草子』(平成九年十一月二十日 小学館)九五頁。
- (20) 小山氏は「鸚鵡返し」という技法について、「俊頼の時代、すなわち十二世紀始めには、明文化されてはおらずとも技法としては周知のものだったのだろう」(二〇六頁)としている。

- (21) 寿永三年書写の『三宝感应要略録』(上・中・下三巻、三冊)を収録した『尊経閣善本影印集成四三 三宝感应要略録』(平成二十年六月三十日 八木書店)では巻上・仏宝聚・第一七に「阿弥陀仏化作鸚鵡鳥引起安息国感应第十七」(五六頁)の記事が見られた。
- (22) 「鸚鵡の往生の話は、中世にかなり流布していることが分かる。先行研究を踏まえると、①『三宝感应要略録』『今昔物語集』『金言類聚抄』と、②『龍舒浄土文』『鎮西宗要』『私聚百因縁集』『発心集』に分類することができた。」(平間理俊「法然上人伝法絵『善導寺本』にみられる説話の生成と展開——鸚鵡の往生譚・蝙蝠の転生譚を手がかりに——」、『佛敎文化研究』第六五号〈令和三年三月三十一日 浄土宗敎学院〉一五頁)。
- (23) 「仏説阿弥陀経」には「彼国には常に種種奇妙なる雑色の鳥有り。白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命の鳥なり。是諸衆の鳥昼夜六時に和雅の音を出す」(『昭和新纂 国訳大蔵経』經典部第二巻〈昭和五年二月十日 東方書院〉一六六頁)とある。
- (24) 趙玉萍「観音図中の白い鸚鵡について」(『文化史学』第七六号〈令和二年十一月二十五日 文化史学会〉)に於いて、明・正統八年(一四四三)に完成された北京・法海寺の水月観音壁画、明・万曆二十一年(一五九三)に制作された九蓮観音菩薩像などを挙げ、「白い鸚鵡が観音図の中に眷属として描かれるのは一つの類型になっていることが窺える」(五二頁)としている。
- (25) 吉田昌志「補注」(『泉鏡花集 新日本古典文学大系明治編二〇』〈平成十四年三月十八日 岩波書店〉)四〇二頁。
- (26) 王昭君の故事について、吉田氏は「やまと昭君」と「琵琶伝」の「両作に介在しているのが、王昭君の故事であって、題名が、匈奴に嫁した悲運の女性王昭君の日本版を綴る意である『やまと昭君』の刊本の表紙に鸚鵡と琵琶が描かれていることにも明らかなように、王昭君が胡国に赴く道中、馬上で琵琶を弾じて自らを慰める事跡は、説話ばかりでなく、物語絵ともなって、古来本邦に広く流布したイメージであった」(四〇二頁)と解説している。さらに、吉田氏は明治二十八年五月発表の鏡花の評論「愛と婚姻」で、「婚を強ひ」られた例に王昭君が引かれていること指摘し、このことから「近藤に嫁したお通の悲劇を描く『琵琶伝』の発想の直接のモメントを、この評論に求めることができよう」と

した(四〇二頁)。

- (27) 越野格「妄想・「琵琶伝」」(『国語国文学』第五三号〈平成二十六年三月二十日 福井大学言語文化学会〉四二頁)。  
引用は『国文学年次別論文集 近代Ⅰ』(令和二年九月 朋文出版)に拠る。以下、越野論文と略記し、掲載誌の頁数のみを示す。引用部に於ける読点のコンマは原文のママである。
- (28) 今橋理子「白鸚鵡と美少女(下)」——〈鸚鵡文学〉の祖形としての鏡花小説」(『学習院女子大学紀要』一九卷〈平成二十九年三月三十一日 学習院女子大学〉)四七頁。以下、今橋論文と略記し、掲載誌の頁数のみを示す。
- (29) 今橋理子「鸚鵡の肖像——〈花鳥画〉と〈美人画〉の境界」(『文学』隔月刊第一〇巻第五号〈平成二十一年九月二十五日 岩波書店〉)一三二頁。
- (30) 竹田晃・黒田真美子編 竹田晃・檜垣馨二著『中国古典小説選七 緑珠伝・楊太真外伝・夷堅志他(宋代)』(平成十九年三月二十五日 明治書院)一〇二頁。
- (31) 「鸚鵡呼琵琶」(巻七・二九・第二五丁裏から第二六丁表)。(浅井了意『新語園』(天和二年二月 書林梅花堂)全一〇巻。引用は再版本(天和二壬戌年仲春上澣、書林梅花堂、梶川常政・小佐治宗貞・小佐治忠治開版)の編者蔵本(全一〇巻、一〇冊)を底本とした吉田幸一編『古典文庫四二〇冊 新語園(下)』(昭和五十六年九月二十日 古典文庫)に拠る。以下、『新語園』からの引用は、作品名(巻数・話数・丁付)のみを示す。
- (32) 『日本古典文学大辞典』第三卷(昭和五十九年四月二十日 岩波書店、四六二頁)、『新語園』について、花田富一夫『新語園』と類書——了意説了漢籍への示唆——(『近世文芸』三四卷〈昭和五十八年五月三十日 日本近世文芸会)に拠れば、『新語園』記載の中国説話はある特定の類書数点から抜粋したものと考えられる(二三頁)として、『事文類聚』、『天中記』、『太平広記』、『太平御覧』の四つの類書が挙げられている。このうち『新語園』の「鸚鵡呼琵琶」に類似した逸話が掲載されていたのは『事文類聚』、『天中記』である。その他の資料について独自に調査したところ、『円機活法』という詩学書にも類似逸話が掲載されていることを確認した。『事文類聚』は、宋の祝穆が前集六〇巻・後集五〇巻・続集二八巻・別集三二巻を成し、淳祐六年に成立した。後に、元の富大用が新集三六巻・外集一五巻を、元の祝淵が遺

集一五巻を追加し二三六巻となった。寛文六年刊の訓点付き和刻本を底本とした『第二巻 和刻古今事文類聚 後集

国文学研究資料文庫九』(昭和五十七年十月二十五日 ゆまに書房)では、後集・巻四三・第一九丁表に「鸚鵡伝呼」(五二七頁)という逸話が掲載されている。『天中記』は、陳耀文が編纂し、明・万曆二十三年に序刊された類書(全六〇巻)である。『四庫類書叢刊 天中記(全三冊)』(平成三年八月 上海古籍出版)では、巻五九・第二七丁裏に「呼琵琶」の逸話が掲載されている。『円機活法』は、詩学全書・韻学全書からなる全二四巻の資料で、明代の楊涼の著と伝えられる。王世貞校『円機活法』(明治一六年 山中出版舎)では、詩学・一三巻・第六丁表に「伝呼琵琶」という逸話が掲載されている。また、『新語園』の基となった『語園』では「鸚鵡賊ヲ告事」という、鸚鵡の告げ口によって姦通が暴かれるといった内容のものが「開元遺事」から収録されている。「鸚鵡賊ヲ告事」や「琵琶伝」、「やまと昭君」、その基となったアラビアン・ナイトの「夫と鸚鵡」等には姦通というモチーフと鸚鵡との連鎖が見られる。洋の東西を問わず、冤罪である場合も含め、姦通と鸚鵡がセットで用いられていることが分かる。

(33) 「泉鏡花蔵書目録」(『鏡花全集』第三巻月報一四(昭和十六年十二月 岩波書店)。「日本文学研究資料新集二二 泉鏡花・美と幻想」(平成三年一月七日 有精堂出版)所収、二二二頁。)には、「新語園(木)十冊」(木Ⅱ木版本)とある。

(34) 須田千里「鏡花文学の源泉 中国文学、江戸文学、民譚、挿画」(『ユリイカ』一〇月号第三三巻第一三三号(平成十二年十月一日 青土社))に拠れば、「新語園」(浅井了意が漢籍から奇談・説話を集めたもの)に拠るもの↓「聞きたるま、」(明治四〇・二)の蘇東坡と李白の話、「唐模様」(明治四五・三、六)。なお、『新語園』は漢字片カナ混じりであり、翻訳ではないが、仮にここに挙げておく。(一六六頁)として、『新語園』に拠る鏡花作品が指摘されている。

(35) 井上円了『妖怪学講義 緒言 総論』(明治二十六年十一月五日(明治二十七年十月二十日 哲学館)初版)、全二四巻。『妖怪学講義合本第一冊 緒言及総論』(明治二十九年六月十四日 哲学館)増補再版)では「参考書目拾遺」の之之部に「新語園」(四頁)の名前が確認できる。本書は明治二十九年に再版され、講義録完結後、各冊各部を合綴し、「緒言」(『妖怪学講義緒言』や「参考書目拾遺」等)を加えた全八巻全六冊の合本である。

(36) 「鸚鵡語夢」(巻七・二七・第二四丁表から第二四丁裏)の全文を引用する。

鸚鵡ハ點慧ノ鳥ナリ能ク人語ヲ学フ唐ノ開元年中ニ嶺南ヨリ白鸚鵡ヲ獻ツル是ヲ宮中ニ養コト年久シ狎愛シテ聰慧利根ニシテ人ノ言学バズト云コト無ク能ク先立テ人ノ意ヲ知ル玄宗及ビ楊貴妃甚ハタ寵シテ雪衣娘ト名テ呼詩ノ篇ヲ教玉フニ数遍ニシテ能ク誦ス玄宗常ニ楊貴妃ト棋を囲玉フニ玄宗ノ方負色ナル時ニ雪衣娘ト呼玉ヘハ必ス飛テ盤ノ上ヘニ入テ鼓舞シテ以テ其ノ石ノ行列ヲ乱ス一日楊貴妃ノ鏡台ニ登テ語テ曰雪衣娘昨ノ夜ノ夢ニ鶯鳥ノ為ニ搏タリト見ル是レ此ニ尽ト将乎云フ玄宗乃シ貴妃ニ命シテ般若心経ヲ授シメ以テ是ノ灾ヲ禳シム後ニ殿上ニ於テ端近ク戯フレテ鸚鵡ヲ遊シメラル忽チニ鷹来テ鸚鵡ヲ搏テ斃ス玄宗ト與ニ貴妃ニ嘆キ傷テ悲哀シ給フ遂ニ戸ヲ苑ノ中ニ瘞テ為ニ冢ヲ築テ鸚鵡冢ト名クト云フ

(37) 場面④に於ける作品内の季節は、謙三郎が出征に際して清川家を訪れている場面で、「永き夏の日に尽きざるに、帰營の時限迫りたれば」(第二章、三九頁)と述べられていることから、夏として設定されていることが分かる。夏という季節に於いて鸚鵡の白を「あはれ消残る樹間の雪」(第二章、三九頁)としていることが特筆できる。

(38) 「鸚鵡悲上皇崩」(巻七二二八・第二五丁表から第二五丁裏)の全文を引用する。

二十八 鸚鵡悲上皇崩<sup>イナカノミ</sup> 建炎実録<sup>イナカノミ</sup>

宋ノ徽宗皇帝ノ時ニ隴西ヨリ調貢トシテ毎<sup>コトトシ</sup>歳鸚鵡ヲ獻ツル徽宗帝是ヲ安妃閣ニ置テ詩文ヲ教テ唱シメラル能ク覺テ歌ノ宣和ノ末ノ年ニ及ヒテ皆ナ中使ニ勅シテ故郷ノ棲処ロナルヲ以テ隴西ニ送リテ本土ニ放チ還<sup>カエ</sup>レタリ後ニ郭浩ト云フ人乃シ秦鳳ノ提刑ト云フ官ニ補セラレ隴西ノ辺ニ赴クニ白鸚鵡ト紅鸚鵡ト樹ノ枝ニ並ビ居テ郭浩ヲ見テ何方ヨリノ人ゾト言ヲ挂テ問ケレバ郭浩奇特ニ思ヒテ杭州ヨリ来ルト対フ徽宗皇帝ハ安泰ニ御在カト云フ上皇ハ去ヌル頃ニ崩御ナリシト対タリニツノ鸚鵡是ヲ聞テ悲ミ鳴声頻ニシテ已ス聞ニ涙ノ零<sup>チ</sup>テ哀ナルコト措所ロナシ郭浩感傷シテ詩ヲ賦シテ曰隴口山深草樹荒行人到此断<sup>ト</sup>肝間<sup>ト</sup>耳<sup>ト</sup>辺不<sup>レ</sup>忽<sup>レ</sup>聽<sup>ニ</sup>鸚鵡<sup>ト</sup>猶在<sup>ニ</sup>枝頭<sup>ト</sup>一<sup>ト</sup>說<sup>ニ</sup>上皇<sup>ト</sup>

(39) 「プラマの流行も下火となりモロモツト少し首をもちやげか、りしに鸚鵡もまた勢ひを得て上物百円より中の五十円くらゐなり」と(『東京朝日新聞』朝刊(明治二十三年三月九日 東京朝日新聞社)四面)。「人真似に巧みなる鳥類に



ては鸚鵡は衰運にて九冠鳥の全盛期にて人真似の出来るもの十五六円より百円位迄鸚鵡は二十円乃至百円異鸚鵡が五十円より二百円カケス、ハクカ鳥桃色インコ、天竺バタン、ダルマイインコ等は音声人に似ざる為真似は出来ても愛禽家に受けず従つて相場は極めて安し」(『読売新聞』朝刊〔明治四十三年五月三日 日就社〕三面)。明治二十年頃の相場では、週刊朝日編『値段史年表 明治・大正・昭和』(昭和六十三年六月三十日 朝日新聞社)に拠れば明治二十七年の公務員の初任給(月俸)が五十円で、明治十九年・明治三十二年の東京大学の授業料(年額)が二十五円である。

- (40) 『文芸倶楽部』の「鸚鵡石」に関する記事として、立田紅於園「勝地案内 伊勢の鸚鵡石」(『文芸倶楽部』第六卷第七編〔明治三十三年五月一〇日 博文館〕)、加藤富字「諸国奇談 鸚鵡石」(『文芸倶楽部』第七卷第六号〔明治三十四年五月一日 博文館〕)、窮象子「諸国奇談 常宮の二奇談(龍燈の松 鸚鵡石)」(『文芸倶楽部』第七卷第一二号〔明治三十四年九月一日 博文館〕)などがある。

(41) 【鸚鵡】ジャパンナレッジLiDi『日本国語大辞典』(令和四年十二月四日 閲覧)

(42) 【鸚鵡石】ジャパンナレッジLiDi『角川古語大辞典』(令和五年十月二十一日 閲覧)

(43) 注(40)で挙げた「諸国奇談 鸚鵡石」や「諸国奇談 常宮の二奇談(龍燈の松 鸚鵡石)」では、鸚鵡石が音を反響するのは物理の理屈であることは理解されているが、奇談として紹介されており、明治に於いても人々が不可思議なものに惹かれる心理が見て取れる。

(44) 柳田国男と鏡花の関連性について、柳田晩年の回顧録『故郷七十年』ではその出合いが語られる。『故郷七十年』に拠れば、柳田と鏡花は東京帝大で初めて対面し、その時の柳田の様子を、鏡花は「湯島詣」で「小説のはじめの方に、身軽そうに窓からとび上る学生」として登場させている。その出合いから、柳田は「暇さえあれば小石川の家に訪ねて行ったりした。それ以来、学校を出てから後も、ずっと交際して来た」という(以上、柳田国男『故郷七十年』〔昭和三十四年十一月二十日 のじぎく文庫〕初出。『柳田国男全集』第二一卷〔平成九年十一月二十日 筑摩書房〕所収、一五〇頁)。

(45) 公山或田「鸚鵡」(『校友会雑誌』第三九号〔明治二十七年十月七日 第一高等学校校友会〕五六頁)の全文を引用する。

父なる人失せて後、世渡りのたつきも絶え、あたりもいとつれなかりしかば、それを憂ひて、悒悒として楽しまざりし我友は、つひに去年の暮に身まかりて、老たる母を残しぬ、昔にかはる家の中に、留れるものは、唯一羽の鸚鵡なり、鸚鵡の羽の雪よりも白くて、世の塵にそまぬげなるもいと哀なるに、旭の影うら、かなる朝は、おのつから種々の言とかたるめり。そか「後藤さん、後藤さん」とかたるは、父君ぬませし頃、屢来たりし人の名なりと、母君かたりたまひぬ。はかなき恋の歌など、よく聞覚えて、唱ふる時は、ふしにつれておどるとぞいふなれど、今はものうがりたまひて、見たまふことだにまれなれば、かひなし。いそぐ事ありて、門を通り過ぎむとする時、此鳥の清く鋭くよぶ聲をきけば、我胸はさぐるやうにて、ふと立よりて、かの母君と、昔話をするが常なりき。

簡にして情あり徒然草の一節をよむが如し

雪よりも白い羽毛を持つ鸚鵡、「後藤さん、後藤さん」という呼び声、恋の歌を聞き覚えて「ふしにつれておどる」という人間のように振る舞う姿など、鸚鵡琵琶との共通点は多い。且つ、『新語園』に見られる鸚鵡の特徴も見られることが分かる。明治三十年頃が鏡花と柳田の出会いと推定されているが、この小文が発表された時期（明治二十七年）に両者の交流はあったのか、偶然であるのか、現時点の調査では不明である。

(46) 同右、五六頁。

(47) 「黒壁」は明治二十七年に『詞海』に発表された短篇小説で、魔境と畏怖される黒壁を舞台に、深夜丑の時詣に遭遇した「予」の恐怖が一人称視点で語られる。『詞海』は明治二十五年から二十八年まで発刊された文学雑誌で、硯友社の作家による短篇小品発表の場となっていることから、同派作家として鏡花も「黒壁」を発表したものだと思われる。「黒壁」から、明治二十七年という最初期に於いて鏡花の怪異への志向が読みとれる。

【図版①】 泉鏡花「琵琶伝」（『国民之友』第二七七号（明治二十九年一月四日 民友社）、三六頁）。

【図版②】 山梨大学附属図書館近代文学文庫蔵 尾崎紅葉『やまと昭君』（明治二十二年八月二十四日 吉岡書籍店）。国文学研究資料館の「近代書誌・近代画像データベース」<https://school.nijl.ac.jp/kindai/YMNK/YMNK-00601.html#1>とし

て公開される画像に拠る。

【付記】 本論文は、二〇二二年度に京都女子大学文学部国文学科に提出した卒業論文を基にしたものである。その後の卒業論文発表会（五月十三日（土）於：京都女子大学）の席上に於いて、また、今回の論文掲載に関わって、貴重なご指導・ご指導を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。